

観音堂の蹄音

たかとり たまよ
高鳥 珠代



受賞のことば
遠い日、馬と過ごした父の背中を胸に、記憶の風景をたぐり寄せ、言葉にしてみました。馬頭観音に手を合わせる父の姿——その祈りに込められた思いを、静かに辿りました。書くという営みの意味を、あらためて見つめ直す機会となりました。このたびは、作品をお選びいただき、心より感謝申し上げます。

プロフィール
横浜生まれ横浜在住。
30歳から5年間、米国シンシナティで暮らす。エッセイや小説を執筆し、各賞での受賞歴がある。奈良大学通信制文学部文化財歴史学科を卒業。代表作：北の開拓村〜父の物語(文芸社)

馬のいる暮らしというのがどういふものなのか、正直なところ、わたしにはよくわからない。わたしが生まれ育ったのは横浜。見渡せば坂とビルと道路ばかり。小学校の通学路の途中に馬がいるような風景は、わたしの記憶の中にはない。

けれど、わたしの父は違った。

父は北海道のオホーツク紋別出身である。そこは寒さの厳しい、雪に埋もれるような土地だ。戦前、開拓民の息子としてその地に生まれ、その地で暮らした。そこで家族は農業を営みながら、馬を育てていたという。

「馬が育ててくれたようなものだ」

父はよくそんなことを言った。冗談のようであり、たぶん半分は本気だった。

その当時、軍に引き渡す馬——いわゆる『軍馬』の育成は、農作業よりずっと実入りがよかったからだ。戦争が深まるにつれ、軍用に供出される馬の数も増え、村ではそれに応えるために、家族総出で馬を育てていた。家族の暮らしを支えるために、馬を育てる仕事は欠かせないものだった。

たしか、わたしがまだ小さかったころのこと。父と一

緒に近所の観音堂にお参りに行くと、境内の片隅にひっそりと立つ小さな馬頭観音に、かならず立ち寄った。それは、誰も足を向けないような地味な石仏。けれど父は、長い時間をかけて手を合わせた。

帰り道、「なんであそこに手を合わせるの?」と父にたずねると、「供養だよ」とだけ答えた。「誰の?」と聞くと、少し笑って「馬たちの」と言った。

そしてぽつぽつと話してくれた。戦争のこと、開拓のこと、そして、馬のこと。

その当時、父の家でも、やはり軍馬を育てていたらしい。日中戦争から太平洋戦争へと突き進む中で、乗用馬や輸送馬への需要が一気に膨れ上がった。

「二歳になると軍が買っていくんだよ。そこから訓練を受けて、五歳くらいで前線に行く。」

父はそう言って、しばらく遠くを見るような目をしていった。馬たちがどこへ行き、どんな運命を背負わされたのか。父はあの視線の先に、いったい何を見ていたのだろうか。

第二次世界大戦を描いたハリウッドの戦争映画では、

ジープや戦車、軍用機が、物資や兵士を乗せて、砂煙を上げながら戦場を駆け巡っているシーンをよく目にする。けれど、同じ時代の日本軍は、アメリカ軍のそれとはまったく違っていった。日清・日露戦争から五十年近く経っていたが、そのころの軍事事情とあまり変わらず、多くの部隊では馬が兵士を乗せ、荷を引き、伝令として前線を駆け回っていた。

圧倒的に機械化が遅れていた日本の軍隊を、黙々と支えていたのは、ほかならぬ馬たちだったのだ。

「とにかく、軍の注文に応えるのが第一だった。うちの村だけじゃなく、近隣の開拓地でも、みんなが競うように馬を育てていた。誰が一番良い馬を出すか、どこが品評会で評価されるか、それこそ見えない戦いみたいなんだよ。いい馬をたくさん育てていないと、軍は農耕用の馬まで、容赦なく連れていってしまう。だから必死だった。」

その中でも父の家は、軍馬の品評会で何度も賞を取り、名馬と呼ばれる馬を何頭も送り出していたそう。だ。「みんな、天塩にかけて育てた。いなくなるってわかっていても、やっぱ里情が移る。だから取って名前はつけない」



それでも、別れの時はつらい。軍用トラックの荷台に乗せられていく馬の背を見送るたび、心が引き裂かれるような思いがしたという。そしてよく口にした。「いまだに、あのときの胸の痛みが忘れられない」と。

年齢を重ね、自分の家族を持つようになると、わたしはその言葉の重みが、だんだんとわかるようになってきた。命を育て、それを国に差し出す。どれほど理屈で割り切っていても、感情までは切り離すことなどできない。

戦時下、人間だって同じだった。ふつうに暮らしていた家族から、父を、夫を、兄弟を、そして大切に育てた息子を、戦争が容赦なく奪っていった。

父にとって、馬はまぎれもなく家族だった。そのことを思うと、あのとき父が感じていた痛みは、想像に難くない。

「どこに送られたのか、何に使われたのかもわからない。知らせはなかった。ただひとつ、出て行ったら二度と帰ってこないってことだけは、わかってた」

だからこそ、せめてできるだけのことをしてやりたい。良い仕事ができる馬に育ててやりたい。それが、父たちにできる、精いっぱいだったのだろう。

戦争が終わったあと、軍馬たちがどうなったのか、父は多くを語らなかった。野に放たれたものもいただろうし、戦場で命を落としたものもいたはずだ。運よく生き延びたとしても、鍛え上げられた軍馬に、のんびりとした余生が与えられたとは考えにくい。

「一度戦う体になされた馬は、もうもとの穏やかな馬には戻れないんだよ」

そうつぶやいた父の声は、どこか痛みと諦めがにじんでいた。

けれど戦後になり、生活は変わった。軍馬として軍部に送られなかった馬たちには、戦前と同じように、畑を耕し、荷を運ぶことが仕事だという、ふつうの暮らしが戻ってきた。

そして父は、馬たちに名前をつけるようになった。よく「だって家族だからな」と言いながら、耳を撫でてやっていたそうだ。「戦争の時、辛くて馬に名前をつけてやれなかったぶん、こんどはちゃんと名前をつけて、大切に、大切に育てたんだ」と父は語った。

寒い夜には毛布をかけ、凍らないように乾草を多めに敷き、風邪をひけば何日も付きっ切りで看病したという。「馬はしゃべらないけれど、気持ちは通じるんだ」

父のその言葉には、静かな確信のようなものがあつた。それからは、亡くなった馬の墓を作り、供養も忘れなかったという。失ったものへの悔いと、生き残った馬たちへの感謝。その両方を抱えながら、父は馬と生きていた。

そんなことを話す父の顔には、あの日から引きずったままの哀しみと、かすかな祈りのようなものが宿っていた。悔恨、感謝、覚悟、そして慈しみ。複雑な感情が、ひとつの表情の中に、ない交ぜに同居しているようだった。

わたしは、その顔を覚えている。そして、馬頭観音の前で手を合わせる、静かな後ろ姿も。

わたしが育った横浜には、「根岸森林公園」という広い公園がある。今は家族連れやジョギングする人が行き交うのどかな場所だけれど、そこはかつて、米軍の競馬場だったという。そして、そのもつと昔は、日本の近代競馬発祥の地でもあった。

戦後、父は米軍基地を渡り歩きながら、最後には、不思議なことに、その公園の近くに居を構えた。紋別の寒村から遠く離れたこの丘の上の、なにが父を引きつけたのだろうか。

なぜそこを選んだのか、結局父は語らなかった。でも、きつと馬の記憶が、どこかで父を導いたのではないかと、いまでは思っている。

馬とともに生きたあの時代の記憶。供養しきれなかった思い。だからこそ、馬と暮らした匂いのするあの場所が、父には居心地がよかったのではないだろうか。

馬に触れたことも、飼ったこともないわたしは、こうして馬のことを思い出すのはきつと、父の語った「思い出」が、どこかでわたしの根を下ろしているからだろう。父にとって馬は、暮らしを支えるためだけの、ただの道具ではない。時には心を打ち明ける親友のような、あるいは血を分けた家族のような存在だったのだと思う。大人になって、久しぶりに根岸森林公園を歩いたとき、沸き立つような草のにおいがした。どこからか、蹄の音が聞こえた気がして、思わず足を止めた。それは父の記憶の残響か、あるいはもう誰も戦に駆り出されることのない世界を願う、馬たちの祈りだったのか。

今も観音堂の片隅には、あの馬頭観音がひっそりと立っている。時折、誰かが草を払ってくれているのか、手入れが行き届き、供えられた小さな花が、静かに風に揺れていた。

きつといまも、あの子たちは、そこにいるのだろう。わたしの知らない、父の世界。けれど確かに存在していた、馬と人の絆の音が、いまも静かに響いている。